

樗流俳句選抄（秋季雜詠）

選者 今津大天 先生

佳作

手投網落鮎狙い群を待つ	高橋照笑
故郷は桑畑の跡茅荒野	畑佐楽人
新盆へ岐阜提灯の明りかな	杉山多美
野仏の頭に止る赤蜻蛉	波多野妙生
有難う労い言いつ案山子ぬく	波多野寿扇
コロナ禍で賑わい失せた地藏盆	丹羽三七九
落鮎を待てば川面を風走る	額瀨久峰
花フスタ赤白黄色菊日和	柴田小舟
調律のピアノボロン赤のまま	岩間芳泉
霧雨に煙る岐阜城夕うすし	二村秀香
裏山に登りて里の紅葉がり	河合 都
コスモスが髪なでくれる散歩道	山内澄香
里芋の露がコロコロ光る朝	国枝紫陽
長命寺白萩続く勅使門	岩田華泉
身に沁むや検査を待てる人多し	兼氏翠月
児の墓に西瓜一切れ供う婆	岩田起正
櫓田を真黒にせし群鴉	河村花玉
紅葉山洪鐘色を深め鳴る	後藤松月
妻逝きて一人で詣る彼岸花	林 巴城
運動会児童等の声援天をつく	畑佐美泉

（地位）

折り折りに風鈴息を吹き返す 御田村光女
 風のない真夏は耐えられない。今は熱中症予防のために積極的に冷房を使うように奨励されて、それでも軒先に風鈴を下げて夏の風情を楽している光景とみる。暑い最中に時折吹いて来る『風鈴息を吹き返す』と詩的に詠じたところが、

（天位）

鳥渡る頃を富山の葉売り 多和田瑠璃
 昔は年に二回程、我が家にも確か富山や奈良の紙風船を置いていたものである。この句の詠じたのか不明だが、いずれにしても懐かしいがよみがえりてくる。「鳥渡る」の季語も感情を表してびりたりである。

落ち鮎の変わる背色に命見る 服部利水
 夜もすがら胡弓の咽ぶ風の盆 野田春香

七 客

ゆらゆらと棚の瓢箪風に酔う 青木凡舟
 研ぎあげし鎌三丁や鰯雲 柴田文花
 草原に馬の嘶き天高し 早津郁男
 薄紅葉往時を偲ぶ道祖神 井戸幸女
 一言が誤解を招く秋の暮れ 舟坂如月
 どぶろくの香の漂へり飛驒の里 安江弥生
 同姓の並ぶ古里柿すだれ 永縄一紅

三 光

（人位）

妻と居て妻と語らず夜半の秋 加藤晴月
 長年連れ添った妻とは取り立てて話すことがないとも、或いは話さなくても共通の時間帯に分かち合っていて共存しているのだとも言える暑さも落ち着いて来た秋の夜の一時を静かに感ぜず過ぎし合える至福を諧謔味を込めて詠じた句である。

選者詠

昇りたき天使の梯子涼新た 大天

樗流俳句次号応募要領

- 一、冬季雑詠（ひとり三句）
- 二、締切り令和三年一月末日厳守
- 三、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 四、所属社名、雅号名記
- 五、樗流会員変名不可
- 六、投句所 〒504-0934
- 七、各務原大野町一丁目一二〇番地
- 八、岩田華泉宛
- 九、電〇五八・三八二・七七二五

樗流俳句選抄本（春季雑詠）

梅村 五月

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
 静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
 伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐楽人
 愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
 蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
 酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
 露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
 懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
 久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
 地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
 散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
 参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
 ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
 爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
 春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
 お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
 髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

〈地位〉

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
 〈評〉 本年は温かいのでパンジーがいじせい
 に咲き揃った。
 老人の皆さんもスマホを駆使されるよう
 なった。
 歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と
 断定された点が景となりつつたわじてくる。
 〈天位〉
 わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
 〈評〉 便利な世の中になった。
 わらび狩りに携帯電話を使い教え合
 っているのだ。
 「おーい、そちは沢山採れるか」「あ
 な、白い岩があるあたりにいじばい生えて
 いるのでこちらへ来いよ」と位置を知らせ
 合っているのだ。
 わらび狩りをするのに携帯電話を使った
 例をはじめて知じた。
 山盛りになりたわらびの束を見せ合
 っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
 山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
 散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額久峰
 春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
 合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
 人口の雪のゲレンデ客疎ら 畑佐美泉
 錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
 墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
 ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

〈人位〉

席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修
 〈評〉 追記に依れば一昨年妻を亡くされ
 娘さんの住んでおられる瀬戸市のホーム
 に入所されていると、ホームでの席替え
 があじて楽しい夕餉が訪れたのだ。
 席を替えたことと時の過ぎてゆく早さ
 がつたわじてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて
 来て歓びにたえない。
 投句の中には「あ、この句どこかで拝見
 したぞ」とか「類句に近いな」と言いた句
 がありました。
 生活の中に生まれたあくまでも自作の句
 を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

一、夏季雑詠（ひとり三句）

一、〆切

一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）

一、所属社名、雅号名記

（樗流会員変名不可）

一、投句所 〒504-0934

各務原市大野町1-120

岩田数美

電（058）242-2254番